

日本の飛行機王

なかじま ちくへい
中島 知久平 (1884-1949)

中島飛行機



§ 人物データファイル

『犬養内閣』より

出生

明治17年（1884）1月1日群馬県新田郡尾島村字押切（現・群馬県太田市押切町）に、中島桑吉・いつの長男として生まれる。生家は、自作農で副業として養蚕や藍の仲買をしていた。

生い立ち

明治31年（1898）尾島尋常高等小学校卒業後、群馬県尋常中学校新田分校（現・群馬県立太田高等学校）への進学を望むが、農家にこれ以上の教育は不要という親の意向から断念。のち出奔して上京、明治35年（1902）専門学校検定試験合格を経て、翌36年、当時横須賀にあった海軍機関学校（旧海軍三校の一つで、機関科に属する士官を養成）に15期生として入学した。

実業家以前

明治40年（1907）機関学校を恩賜の銀時計組（軍学校、国立大学などで成績優秀で天皇から銀時計が下賜された者を呼ぶ）で卒業後、海軍機関少尉に任官。明治44年（1911）海軍大学校（海軍の上級士官教育機関）専科学生となり、同年、陸海軍が共同で設置した気球・飛行機の研究組織「臨時軍用気球研究会」で御用掛（カウチ 研究員）となった。その翌年、海軍航空術研究委員会としてアメリカへ出張、航空機修理技術を取得した。大正2年（1913）横須賀鎮守府海軍工廠造兵部で飛行機の製作・修理工場新設担当の主任、翌年には造兵監督官となり、航空事情視察のためフランスに出張する。このころから、軍人としてよりも民間人として航空機を作ることを考え始め、大正6年（1917）自ら願い出て予備役編入となり、翌年海軍

を退役した。退役にあたっての挨拶状「退職の辞」で、「海軍に於る自己の既得並びに将来の地位名望を捨てて野に下り、飛行機工業民営起立を劃し、以つてこれが進歩發達に盡くし、官民協力國防の本義を完し、天恩に奉ぜんことを期す」と、これからの心情を吐露している。

実業家時代

大正6年(1917)知久平は海軍を退役する2ヵ月前、群馬県新田郡尾島町に知久平ら所員わずか9人の「飛行機研究所」を設立し、翌年「日本飛行機製作所」、翌々年「中島飛行機製作所」となった。肝心の飛行機は、知久平設計のトラクター式複葉機「中島式一型機」以来、ことごとく失敗。大正8年(1919)ようやく試験飛行に成功。これを機に練習機20機の受注が陸軍から入り、会社の経営は順調になった。また、これ以降、軍への納入を三井物産から行うようになった。これは、戦前・戦中の航空機製造分野において、三井物産・中島飛行機連合対三菱重工業★との競争へと連なる。

機体の組み立てから始まった中島飛行機は、大正13年(1924)東京府豊多摩郡井荻町(現・東京都杉並区桃井)にエンジン工場を作り、総合航空機メーカーとして発展を続けることとなる。昭和6年(1931)会社を株式会社とし、社長には弟の中島喜代一が就任したが、この株式会社化は株式の公開をせず、会社解体まで中島五兄弟が所有した閉鎖的な同族会社であり、知久平は筆頭株主であり「大所長(株式会社前は合資会社中島飛行機製作所の所長)、大社長」として、会社の経営に関わりつつ、活躍の場を政界へと移すことになる。

政治との関わり

昭和5年(1930)第17回衆議院議員選挙に群馬1区から立憲政友会公認で立候補して初当選した。これは、創業時の恩人であった武藤金吉代議士の死去に際し、地元後援会からの要請に応えたためである。翌年、国家主義的な政治研究団体「国政研究会」を組織し、論文「昭和維新の指導原理と政策」を著した。同年犬養内閣で、商工政務次官となる。昭和12年(1937)鳩山一郎、前田米蔵、島田俊雄とともに政友会の総裁代行委員に

就任、第1次近衛内閣で鉄道大臣となる。昭和14年（1939）には政友会の分裂に伴い、政友会革新同盟（革新派、中島派ともいう）を結成、総裁となる。昭和20年（1945）終戦直後、東久邇宮内閣で軍需大臣、商工大臣を歴任。

社会・文化貢献

知久平が生涯を閉じたのは中島飛行機三鷹研究所の敷地（現在は国際基督教大学キャンパス）にあった「泰山荘」であった。「泰山荘」は昭和9年（1934）に、実業家山田敬亮の別荘として建てられたが、その多くは移築されたもので、中でも松浦武四郎（蝦夷地を探検、北海道の命名者）が明治19年（1886）に建てた畳一枚の書齋「一畳敷」を含む6つの建物は国の登録有形文化財となっている。

晩年

終戦直前の昭和20年（1945）3月、政府は軍用機の生産増強のため、航空機産業の国営化を決め、4月1日、中島飛行機は第一軍需工場となり国有化されたが、終戦により軍需産業からの転換を図るため、富士産業と改称して再出発した。しかし翌年、GHQによる財閥解体の第1次指定を三井、三菱、住友、安田とともに受け、会社は解体されることとなった。

知久平本人は、昭和20年（1945）12月にGHQによりA級戦犯に指定、翌年1月に公職追放となるが、昭和22年（1947）にA級戦犯指定解除。昭和24年（1949）10月29日、脳出血で死去。享年65歳。墓所は都立多磨霊園。

関係人物

川西清兵衛 大正7年（1918）、知久平は川西財閥の創業者・川西清兵衛からの出資を得て、社名を「日本飛行機製作所」としたが、会社の経営方針を巡り、技術畑の知久平と経営側の川西との対立が発生、翌年には提携を解消した。のちに川西は「川西機械製作所」を創設、「川西航空機」を経て現在、「新明和工業」として飛行艇製造をはじめとする輸送機器製造業を展開している。

武藤金吉 知久平が政界入りするきっかけとなった武藤金吉は、足尾銅

山の鉋毒問題に取り組む田中正造に出会い、田中が天皇に直訴して議員を辞職したのち、自らが衆議院議員となり鉋毒問題に取り組んだ。

糸川英夫 「日本の宇宙開発・ロケット開発の父」と呼ばれた糸川英夫博士（小惑星探査機「はやぶさ」が着陸した小惑星「イトカワ」は博士にちなむ）は、東京帝国大学工学部航空学科を卒業後、中島飛行機に入社し、九七式戦闘機、一式戦闘機「隼」、二式戦闘機「鍾馗」などの設計に関わった。

エピソード

明治45年（1912）アメリカへ出張した際、アメリカ飛行クラブ認定の「万国飛行免状」（飛行機操縦免許）を取得した。アメリカでの操縦免許取得は日本人で3番目だった。しかし、これは公用出張の目的である航空機製作、整備に関する視察からは逸脱したものとされ（なぜなら、同時期に別の海軍軍人が操縦術取得を目的に出張を命じられている）、帰国後大問題となった。

キーワード

発動機「栄」「誉 中島飛行機では、航空機用エンジンとして数々の有名なエンジンを開発・製造した。中でも海軍名称「栄」として知られる空冷星型14気筒エンジンは、3万台以上が生産され、九七式艦上攻撃機、零式艦上戦闘機（ゼロ戦）、夜間戦闘機「月光」、一式戦闘機「隼」などに搭載された。その後継として開発された海軍名称「誉」は、空冷二重星型18気筒で「栄」の2倍の馬力を持ち、局地戦闘機「紫電改」、偵察機「彩雲」、四式戦闘機「疾風」などに搭載された。しかしこの「誉」は当時の工業技術の限界に挑んだ設計であったため、戦争後期の生産資源の枯渇による原料の不足、熟練工員の不足による完成度の低下や燃料の質低下などによって、本来持っている性能を発揮することができなかった悲劇のエンジンと呼ばれている。

中島飛行機VS三菱重工業 第二次世界大戦中、日本の航空機製造業で機体生産数は中島飛行機がシェア28%、三菱重工業は18%、エンジン生産数に至っては、中島が31%、三菱は38%で両社による寡占状態であった。

戦前の日本航空機産業に君臨した両社であるが、会社設立や航空機産業参入の経緯は大きく違っていた。中島飛行機は、会社設立から一貫して航空機のためのベンチャー企業なのに対し、三菱は、財閥の一部門として航空機産業を将来性のある有望な市場として認識し、参入を図ったのである。また、競争試作（主に海軍では性能要求を提示して、複数の会社に競争させ、その結果でよい方を正式化する）では、両社がしばしば、会社のメンツをかけ試作機を作った。

Z計画 日本が緒戦の戦勝に酔っていた昭和17年ころ、知久平は、アメリカの工業力を冷静に分析し、いずれ日本本土が爆撃を受けることを予想していた。翌年、知久平は「必勝戦策」と題する論文を著し政財界へ配布した。内容は、6基のエンジンを備え、20トンの爆弾を搭載する超大型戦略爆撃機で「Z機」と呼び、アメリカ本土を爆撃し、ドイツに着陸するというものであった。昭和18年（1943）この「Z機」を開発する計画「Z計画」を陸海軍が承認。軍需省が加わり、「富岳」計画として官民挙げての開発が始まった。しかしながらその設計は、当時の日本の技術力、工業力をはるかに上回るものであった。中島飛行機の総力を挙げても開発は困難を極め、開発の理解者であった東条英機首相の辞任や、本土防空のための迎撃戦闘機生産優先などの事情で、翌19年6月に開発は中止された。

神奈川との関わり

知久平は、海軍機関学校学生時代や海軍軍人時代を横須賀ですごした。また中島飛行機創業に当初から参加し、のちに重役となり「元老」とよばれた佐久間一郎は、横須賀市久里浜の生まれで、横須賀海軍工廠造機部で製図を担当していた時に知久平と出会った。

§ 文献案内

著作

知久平の著作は下記の2点があげられるが、いずれも群馬県立図書館に所蔵が確認できる。

『昭和維新の指導原理と政策』中島知久平著 [1933] 〈未所蔵〉

『必勝戦策』中島知久平著 [1943] 〈未所蔵〉

社史

「中島飛行機」としての社史は存在しないが、戦後解体されたのち富士重工業として再出発したため、以下の社史には知久平の記述があるものもある。

『富士重工業三十年史』 富士重工業 1984 〈K〉

前史として「大空に賭けた技術の挑戦 -中島飛行機時代-」として、知久平の生まれから中島飛行機設立までが記述されている。

『富士重工業株式会社群馬製作所30年史』 富士重工業群馬製作所 1990
〈K〉

『スバルを生んだ技術者たち 富士重工技術人間史』 富士重工業 1994
〈Y、K〉

『スバルの40年』 富士重工業 1998 〈K〉

『富士重工業50年史』 富士重工業 2004 〈K〉

前史として「夢は大空を翔る -1 中島飛行機の誕生-」で、知久平の生まれから中島飛行機設立、政界進出を経て、その死までを記述している。

伝記文献

『中島知久平健闘録』永松浅造著 八紘書院 1938 〈未所蔵〉

『巨人・中島知久平』渡部一英著 鳳文書林 1955 〈Y〉

『偉人中島知久平秘録』毛呂正憲編 上毛偉人伝記刊行会 1960 〈K〉

『飛行機王・中島知久平』豊田穰著 講談社 1989 〈Y〉

『中島知久平』高橋泰隆著 日本経済評論社 2003 〈K〉

『中島知久平と国政研究会 上・下』手島仁著 みやま文庫 2005 〈未所蔵〉

参考文献

『佐久間一郎伝』加藤勇著 佐久間一郎伝刊行会 1977 〈Yかな〉

『中島飛行機エンジン史』中川良一、水谷総太郎著 酣灯社 1985 〈K〉

『中島飛行機の研究』高橋泰隆著 日本経済評論社 1988 〈Y、K〉

『地下秘密工場』齋藤勉著 のんぶる舎 1990 〈Yかな〉

- 『立憲政友会史 10』山本四郎校訂 日本図書センター 1990 〈Y〉
- 『戦争と共に歩んだ青春』中稲会編 中稲会事務局 1996 〈Y〉
- 『中島飛行機物語』前川正男著 光人社 1996 〈K〉
- 『中島飛行機小泉製作所日誌』松本秀夫著 健友館 1998 〈K〉
- 『中島知久平顕彰記念冊子』富士重工業群馬製作所 1998 〈K〉
- 『中島飛行機エンジンとともに』水谷総太郎著 酣燈社 1999 〈未所蔵〉
- 『さらば空中戦艦富嶽』碓義朗著 光人社 2002 〈未所蔵〉
- 『歴史のなかの中島飛行機』桂木洋二著 グランプリ出版 2002 〈K〉
- 『銀河の里』河内山雅郎著 河内山雅郎 2007 〈未所蔵〉
- 『悲劇の発動機「誉」』前間孝則著 草思社 2007 〈K〉
- 『航空機工業の先駆け』上岡一史[述] 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター 2010 〈未所蔵〉
- 『中島飛行機と学徒動員』正田喜久著 みやま文庫 2011 〈未所蔵〉

<小林利幸>